関係形容詞と二重他動詞

村　上　　丘

Relative Adjectives and Ditransitive Verbs

Takashi Murakami

0　序
1　動詞と形容詞に対する２つのアプローチ
2　能格性に基づく６つの原則
3　意味格に基づく３つの分析
4　認知と文法関係の相互作用
5　結　語

0　序

関係形容詞構文［NP_1 be Adj PP］と二重他動詞構文［NP_1 V NP_2 PP］は，様々な文法的特性を共有する。本稿の目的は次の３つである。第一に，非対格語という用語を導入し，これら２つの構文に備わる通品詞的能格性を解明する。第二に，二重他動詞構文に対するこれまでの提案の問題点を指摘し，意味格を用いた接近法の限界を究明する。第三に，図と地の認知概念と文法関係との相互作用に関する原則を提出し，関係形容詞・二重他動詞双方の構文の説明を試みる。

1　動詞と形容詞に対する２つのアプローチ

形容詞を含む構文と動詞を含む構文との関連性に関し，Lakoff（1970）・Ross（1969）は（１）に類する資料に基づき，形容詞と動詞との上位範疇―述語（predicate）―を設定した。

（１）　a. They are fond of her.
　　b. They like her.

彼らの考察の対象は，主に，(1a) のような，主語を表わす名詞句と前置詞句を伴う関係形容詞（relative adjective），および，(1b) のような，主語を表わす名詞句と目的語を表わす名詞句を１つ伴う単一他動詞（monotransitive verb）である。この対応を図式化すると（２）のようになる。

（２）　NP_1　be　Adj　[P　NP_2]
　　↕　　↕
　　NP_1　V　NP_2

（２）のような対応に着目し，形容詞と動詞の共通性を探る方法を，便宜上，単一他動詞的アプローチ（monotransitive approach）と呼ぶことにしよう。

ところで，形容詞と動詞との関連性は，上記の観点によってのみ把捉されるわけではない。ここでは，形容詞の従える主語名詞句と前置詞句が，それぞれ，二重他動詞構文における目的語と前置

詞句とに対応する場合を考える。これを図式化すれば次のようになる。

(3)　　NP_1　be　Adj　$[P\ NP_2]_{pp}$

　　↕　　↕

NP_1　V　NP_2　　$[P\ NP_3]_{pp}$

このような視点から形容詞と動詞との連関を見ようとする方法を，仮に，二重他動詞的アプローチ（ditransitive approach）と呼ぶことにする。また，関係形容詞の主語および二重他動詞の直接目的語をあわせて非対格語(unaccusative)と呼ぶことにする。二重他動詞的アプローチに基づき次に示す種々の言語事実を鑑みると，関係形容詞と二重他動詞との相通性は歴然とする。(以下の記述のなかには，二重他動詞的アプローチという用語こそ使わなかったものの，Murakami (1983,1984, 1986)，村上 (1986,1987) などで散発的に言及した言語事実が含まれている。)

2　能格性に基づく6つの原則

2．1　下記の例文(4)においては，前置詞句内の名詞句と主語とが交替している。一方，(5)においては，前置詞句内の名詞句と，直接目的語の名詞句が交替している。また，場所格を表わす前置詞 in がwith と交替することも観察される。

(4)　a. Stars were ablaze in the sky.
　　b. The sky was ablaze with stars.
　　(Salkoff, 1983 : 304)

(5)　a. John smeared paint on the wall.
　　b. John smeared the wall with paint.
　　(Anderson, 1971 : 387)

(4)のような対は形容詞だけでなく swarm, hang, teem などの自動詞においても見られる。また(5)のタイプの動詞には spread, provide, pile up などがあり，結合動詞〈verbs of joining〉と呼ばれることもある。これらの構文に共通する形式的特徴は，a の型の構文においては，様々な前置詞が表われうるが，b の型のほうには with しか表われないことである。このことから，blaze 型形容詞・結合動詞構文において，次の原則を設定することができる。

(6)　非対格語と前置詞句内の名詞句が交替する。

(ここでは，どちらの文が，より基本的であるかに関する議論には触れない。)

上記の資料は，文の意味解釈に関連するもう一つの原則の設定を示唆する。すなわち，(4b) (5b) は，全体的解釈を受けることができ，(4a) (5a) は，部分的解釈を受けることができる。この解釈を，例えば Anderson (1971,390) のように直接目的語と主語とに分割して記述しては，有意義な一般性は抽出できない。全体的解釈をうむ構文は，いずれもその前置詞句にwithが含まれていることに注目し，次のような原則を設定することができる。

(7)　with を含む前置詞句を従える非対格語が，全体的解釈の対象となる。

(この原則の記述は暫定的なものである。この原則は，第4節においてより基本的な2つの原則に分解されうることが示される。)

2．2　下記の例文(8)においては，前置詞句内の名詞句と主語とが交替している。一方(9)においては，前置詞句内の名詞句と直接目的語の名詞句が交替している。また，場所格を表わす前置詞 in/fromが of と交替することも観察される。

(8)　a. Good meat is short in the shops.
　　b. The shops are short of good meat.

(cf. Salkoff, 1983 : 317)

(9) a. She cleared snow from the roads.

b. She cleared the roads of snow.

short と同タイプの形容詞には，devoid, empty, bare, free などがあり，一般に，(8b) のほうの構文だけが許容される。これらの形容詞は，欠如詞〈privative〉呼ばれることがある。一方，clear と同様の振る舞いをする動詞には，depossess, strip, などがあり，分離動詞〈verbs of separation〉と呼ばれることがある。欠如詞を含む構文と分離動詞構文の統語的振る舞いは並行する。その特性は，既に見た結合動詞構文の統語特性と一致する。すなわち，欠如詞・分離動詞構文に対しても前記の原則(6)が当てはまる。また，bare, empty, free のように，動詞と形容詞との音形が同一である同音異義的な述語の存在も，これらのタイプの動詞と形容詞とを比較する妥当性を示唆するものと解釈されよう。

ところで，欠如詞と同様，分離動詞も，(9a) の表現が，rob, deprive, purge などのように定着していないものがある（池上, 1981 : 22)。この事実自身，双方の構文の関連性をさらに示唆するものと考えられるが，その説明については第4節で言及する。また，前節と同様この節でも，どちらの構文がより基本的であるかに関する議論には立ち入らない。上記の2つの事例（2.1 および 2.2）は，（全体的・部分的解釈の区別を無視すれば）互いにパラフレーズの関係にある構文を言語資料とし，そこにおいて，何らかの意味において，能格性が検出できることを示している。以下の記述においては，パラフレーズの関係にはないが，その統語的な振る舞いから能格性を提示すると想定される例を観察する。

2．3　例文(10)においては，前置詞句内の所有格代名詞句と主語とが同一指示的である。一方(11)においては，前置詞句内の所有格代名詞句と直接目的語の名詞句が同一指示的である。また，前置詞 for が双方の構文に現われることも観察される。

(10) a. She is eminent for her virtues.

b. Atami is famous for its hot springs.

(11) a. Thank you for your support.

b. I applaud you for your decision.

eminent のような振る舞いをする形容詞には，famous, notorious, celebrated, noted, reputed, conspicuous などがある。一方，applaud のようなタイプの動詞には，thank, congratulate, condole, felicitate などがあり，これらは，発話行為の領域で言う感情表明型〈expressive〉遂行動詞にあたる。上記の言語事実は，famous 型形容詞・感情表明型遂行動詞構文に対し，次の解釈規則を設定することを示唆する。

(12) 前置詞句内の余剰的所有格代名詞は非対格語を指示する。[1]

2．4　例文(13)においては，前置詞句内の定冠詞と主語とが同一指示的である。一方(14)においては，前置詞句内の定冠詞句と，直接目的語の名詞句が同一指示的である。また，前置詞 in が双方の構文に現われることも観察される。

(13) a. John was sick in the stomach.

b. He is blind in the right eye.

(14) a. Max hit his wife in the face.

b. Bill punched John in the ribs.

(cf. Blake, 1982 : 76)

sick に類する他の形容詞には，lame, blind, 等がある。これらは，一様に，なにかしら，機能・性状に関する欠損を表わす。一方，punch に類する他の動詞には，hit, slap, kiss などがあり，表面

接触動詞〈surface contact verb〉と呼ばれる。表面接触動詞の従える前置詞は，in, on, byなどである。このことから，blind 型形容詞・表面接触動詞において，次の解釈規則が設定されよう。

(15)　前置詞句内の定冠詞は非対格語を指示する。

同様の現象は，受動文においても観察される。Quirk et al. (1972, 214) は，前置詞句内の定冠詞が，能動文の目的語，あるいは，受動文の主語を指示すると述べる。

(16)　a. Somebody must have hit me on the head with a hammer.
　　b. I must have been hit on the head with a hammer.

能動文の直接目的語と受動文の主語は，非対格語として括ることができる。

2．3と2．4から明らかなように，前置詞句内の余剰的言語要素の解釈は，非対格語という概念を援用すると一般的に記述することができる。この事実は，英語における文の特定要素の意味解釈に能格性が関与することを示唆するものと解釈されよう。

もちろん，この原則は，英語の全ての構文を説明するわけではない。例えば，身体部位を表わす次のような表現を観察しよう。

(17)　a. The wanted man has a scar on the/his left cheek.
　　(Quirk et al, 1985 : 271)
　　b. He had his hat on his hands.

(17a) の場合，主語と目的語とは譲渡不可所有関係にあり，(17b) の場合，譲渡可能所有関係にある。いずれの場合においても，前置詞句内の余剰的言語要素は，表層目的語ではなく表層主語を指示する。したがって，原則(12)や(15)では，上記の文における余剰的言語要素の適正な解釈は得られない。これらの文における指示表現の束縛に関する条件は，別個に規定される必要があろう。[(2)]

2．5　次のような資料を見てみよう。

(18)　a. Objects are identical with words.
　　b. This kind of rose is different from the others.

(19)　a. Children identify objects with words.
　　b. Can you differentiate this kind of rose from the others?

例文(18)から明らかなように，equal, distinct などの対称的述語〈symmetric predicate〉構文において，ある事物に比較されるもう1つの事物は，一般に，前置詞 to/with/from によって標示される。一方，例文(19)から明らかなように，equate, distinguish などの事物間の同一性・類似性・相違性に関する判断を表わす動詞構文において，比較される2つの事物は，それぞれ，直接目的語・前置詞句内の名詞句内に表われ，前置詞には，対称的述語の場合と同様の前置詞が表われる。要するに，対称的述語構文と比較動詞構文において，次の事実を指摘することができよう。

(20)　非対格語と前置詞句内の名詞句の意味関係は一貫する。

上記の原則は，対称的述語構文のみならず，次のような慣用的表現の意味解釈にも有効である。

(21)　a. His heart is in the right place.
　　b. He has his heart in the right place.

すなわち，(21a)における主語と前置詞句との関係は，(21b)における直接目的語と前置詞句との関係に並行する。後者における主語は，直接目的語の属格形と同一指示的であり，全体の意味解釈に決定的に参画しているわけではない。

さらに次の資料を観察しよう。

(22)　a. That newspaper is devoted to making money and little else.
　　b. That newspaper devotes itself to making money and little else.

(23)　a. She is interested in his business.

b. She interested herself in his business.

devote, involve, occupy, interest, amuse, prepare などの動詞は，再帰形を取る場合と状態的受動構文（statal passive）を取る場合がある。前者の場合，主語と直接目的語の再帰形名詞句は同一指示的である。再帰動詞構文における直接目的語と前置詞句との関係と，状態受動構文（この場合の受動形は，形容詞化していると考えられる）における主語と前置詞句との関係に注目しよう。これらの対を成す構文において，既に設定した原則(20)が適合する。

2．6　上記の考察から次のことが明らかになる。形容詞および動詞という品詞の相違，および，表層レヴェルにおける文法関係の相違にのみ注目しては記述が余剰的になり，言語学的に有意義な一般性を捕捉できない。二重他動詞的アプローチは，動詞を含む構文と形容詞を含む構文とに見られる文法現象を，品詞の相違を越え，かつ，表層文法関係の相違を越えて記述する必要性を提起する。このアプローチは，内在的場所格（inner locative）を表わす前置詞句を媒介に，英語の能格性（ergativity）を解明する手掛かりを提供する。

上記の言語事実のうち2．1および2．2で触れた構文の問題を扱ったものに，Talmy (1978) Hook (1983)，および Grunau (1985) がある。これらの論考は，これまでに提案されてきた格関係に対し，新機軸を出そうとする試みを含有する共通点を有する。以下の節では，それぞれの提案の概略を述べ，それらのはらむ問題点を指摘する。

3　意味格に基づく3つの分析

3．1　Talmy (1978) は，これまで提案されてきた被動作主・源泉格・目標格などの意味格にかわるものとして図（Figure）と地（Ground）を設定する。この提案に従えば，分離動詞構文は次のように表示できる。

(24)　a. I drained the blood from his veins.
　　(F)　　(G)

b. I drained his veins of their blood.
　　(G)　　(F)

この提案の問題は，次のようなものである。ルービンの図形を持ち出すまでもなく，図と地とは認知的な概念であり，その認定は意味的に一義的に規定されるべきものではない。ある部分が卓立して認知されれば，残りの部分は後退し背景として認知される。すなわち，同じ状況下にある同じ特定事物でも，表現者の視点により，図になったり地になったりする（児玉, 1988：23)。

(25)　a. *The statue* is on the pedestral.

b. *The pedestral* is under the statue.

例えば，上記の例文におけるイタリックの部分は図，その他の部分は地として解釈される。

(24a) における the blood を図とし，his veins を地とするのは問題はない。主語，および，直接目的語の機能を担う名詞句は，場所格内の名詞句より卓立の度合が高いと考えられるからである。しかし，(24b) において，his veins が相変わらず地としての機能を与えられているというのは（もし Talmy が図と地とを認知的な概念として捕えているのであるなら）妥当ではないと考えられる。何故なら，(24b) における his veins は，意味的に場所格であっても文法的には直接目的語であり，認知的には図と考えられるからである。結局，この提案の問題点は，本来，心的・浮動的・相対的・表層的な概念である図と地の対立概念を，意味的・固定的・実体的・深層的なものとして認定したところにあると考えられる。

3．2　Hook (1983) は，英語の格関係のレパートリーに，これまで名づけられていなかった格関

係である分離格〈abstrument〉を設定する。この結果，英語における格関係は，被動者(Patient)，着点格 (Goal)，道具格 (Applicative Instrument)，源泉格 (Source)，および，分離格の5つになる。分離格，道具格，および，源泉格は，次の各文のイタリックの部分で示される。

(26)　a. Nobody will deprive us of *our rights*!
　　b. Who will provide us with *the necessities of life*?
　　c. Nobody will take our rights from *us*!
　　(Hook, 1983 : 183)

被動者を除いた4つの格は，互いに緊密な関係にある。分離格と道具格，源泉格と着点格の関係は，次の対から窺うことができる。

(27)　a. to empty a bin of its coal
　　b. to empty coal from a bin

(28)　a. to load a bin with coal
　　b. to load coal into a bin

Hookは，分離格／道具格から源泉格／着点格を区別する特徴として自動性〈motility〉を掲げる。即ち，分離格と道具格は自ら動くことができるが，源泉格と着点格は動くことができず，運動の参照点〈reference points〉を決定する。この区別に与かる素性を中心性〈center〉と呼ぶ。一方，源泉格／分離格から着点格／道具格を分離する特徴として，Hookは運動の方向性を指摘する。前者は乖離・離脱を表し，後者は接近・添付を表す。この区別に関与する素性を遠心性〈centrifugal〉および内心性〈centripetal〉と呼ぶ。分離格，道具格，源泉格，着点格の4つの格は，［遠心性］対［内心性］，［＋中心］対［－中心］の素性によって以下の図のように区分される。(被動者は，他の4つの格の中和とみなされる。)

(29)

	centrifugal	centripetal
＋center	SOURCE (from etc.)	GOAL (to etc.)
－center	ABSTRUMENT (of)	INSTRUMENT (with)

この提案に従えば，分離動詞構文は次のような意味格を付与される。

(30)　a. I drained the blood from his veins.
　　(Source)
　　b. I drained his veins of their blood.
　　(Abstrument)

この提案の問題は次のようなものである。第一に，この分析では，［＋中心性］の素性をもつものは複数の前置詞が顕現する可能性がある (from, off from, out from ; to, onto, into) のに対し，［－中心性］の素性をもつものは単一の前置詞が選択されるという非対称性を説明することができない。第二に，［遠心性］［内心性］という素性は余剰的である。なぜなら，道具格と分離格は，反意を表わす接辞を動詞に付加することにより，相補分布的に具現することが観察される。

(31)　a. They armed the man with/＊of his weapon.

b. They unarmed the man of/＊with his weapon.

(32) a. He burdened himself with/＊of pent-up resentments.

b. He unburdened himself of/＊with all his hidden fears and anxieties.

(Hook, 1983 : 183)

(33) They decided to depopulate the land of its aboriginal inhabitants and re-populate it with immigrants.

(Hook, 1983 : 184)

この事実は，動詞の意味により前置詞の選択が予測可能であることを示唆する。

3．3 Grunau (1985) は，従来提案された意味格が等質的な原始的要素であるという前提に疑いをかけ，意味関係を意味情報と意味タイプの２種に分ける。前者は，当該の関与者（項）が，それについて陳述する情報を持っているか否か（他の言語要素がその項の位置標示に与かるか）を表わし，[±attribute] の素性で表示する。後者は，Gruber の言う非対称的場所関係（asymmetrical localistic relationship）に関わり，当該の項が，他の項に対し，図と地のどちらに配属されるかを表わし，[±figure] のような素性で標示される。全ての項は，意味情報に関し，必ずしも標示される必要はないが，意味タイプについては，すべて明示されなくてはならない。

Grunouは，直接目的語は，[＋att] でなければならないと主張し，場所格と動作主を除いた意味格を，上記の素性を用いて，次のように配分する。

(34)

	＋figure	－figure
＋attribute	THEME	EXPERIENCER RECIPIENT POSSESSOR
－attribute	Object of experiencer verb	LOCATION, GOAL (& SOURCE)

この提案に従えば，分離動詞構文は次のように表示されるものと思われる。

(35) a. I drained the blood from his veins.

[＋fig, ＋att] [－fig, －att]

b. I drained his veins of their blood.

[＋fig, ＋att] [－fig]

この提案の問題は次のようなものである。第一に，直接目的語という文法関係によって意味格を規定するため，本来，表層とは無縁なはずの意味格が，表層構造が規定されるまでは決定できないという矛盾を含む。第二に，相対的・表層的な概念である図と地の対立概念を，意味素性として導入したため，心理的述語構文の分析に次のような支障をきたす。上記の図表によれば，心理的述語構文は次のような素性が与えられよう。

(36) a. I am interested in the book.

[－fig, ＋att] [＋fig, －att]

b. The book is interesting to me.

[+fig, −att]　　[−fig, +att]

(36a) の主語は，それを陳述する要素 the book を従えているので，[+att] の素性は妥当であるが，主語の位置にありなおかつ人間であるのに，[−fig]の素性が与えられているのは妥当ではない。一方，(36b) の目的語meが [−fig] の素性を付与されているのは当然であるが，それ自身を陳述する要素を持たないのに，[+att] の素性が与えられているのは矛盾である。

第三の問題として，次の構文を考えてみよう。

(37)　a. It is foggy in LA.
　　b. LA is foggy.

(37a) の LA は，場所格なので，(34) の図表に従えば [−fig, −att] の素性で標示されよう。一方，(37b) における LA は THEME と考えられるので，[+fig, +att] と標示できる。とすれば，双方は，素性の価値に関し，全く異なる意味標示を付与され，相互の関連性は皆無になる。このことは，直観的に把握することのできる2つの構文の共通性が，上記の素性を用いると把捉できないことを意味する。

4　認知と文法関係の相互作用

4．1　既に見た3つの先行研究におけるそれぞれの提案は，固有の問題をはらむ。これらの先行研究の批判的考察から，次のことが明白になったと思われる。

第一に，これらの提案においては，いずれも，(新しい素性を導入して)意味格を再編するか，もしくは，新しい意味格を導入してそのレパートリーを拡大することが試みられている。しかし，これらの提案は当該の構文を分析するに当たりいずれも問題を抱えている。この事実は，いくら意味格を再編成して意味部門を充実させようと，そこに有意義な一般化を見出すことはできないことを示唆するものと思われる。このことは，当該の構文の分析に当たっては，意味情報に考慮を払いつつも，統語部門を充実させるアプローチを採択することを要請していると解釈されよう。

第二に，これらの3つの提案のうち2つは，認知的概念である図と柄との対立を導入している。既に述べたように，これらの概念は，言語要素の表層レヴェルにおける先行関係に規定され，深層レヴェルあるいは意味格において使用するにはふさわしくない。しかしながら，この事実は，これらの対立概念が，当該の構文の分析に全く適合しないことを意味するわけではないと思われる。これまでの先行研究においては，これらの認知的概念を深層レヴェルにおいてのみ援用していた。それらを表層レヴェルにおいて適用してその効果を検証する試みは有意義であると考えられる。

4．2　図と地の区分は，相・時制・他動性など様々な言語的範疇の説明に導入されてきた (cf. Wallace, 1982) が，以下の議論は次の前提に基づく。

(38)　図と地の区別は，表層レヴェルにおける文法関係において適用する。

第2節で導入した非対格語という用語を思い起こそう。繰り返すが，非対格語とは，非状態性の自動詞構文における主語と，他動詞構文における直接目的語を指し，言語構造の最終レヴェルにおいて規定される。ここで，次の原則を設定することを提案する。

(39)　非対格語の原則
　　非対格語は図 (Figure)，前置詞句内の名詞句は地 (Ground) として，それぞれ解釈される。

意味的に等価な次の例文を見てみよう。(この構文は，(25) として既に掲げたが，(40) として再掲する。)

(40)　a. The statue is on the pedestral.

b. The pedestral is under the statue.

上記の原則に従えば，(40a) においては，the statue は図，the pedestral は地として解釈され，(40b) においては，the statue は地，the pedestral は図として解釈される。そして，この解釈は妥当なものであると考えられる。

上記の原則をさらに検証するため，これまで見た言語資料を再考してみよう。

(41) a. Stars were ablaze in the sky.
b. The sky was ablaze with stars.

(42) a. John smeared paint on the wall.
b. John smeared the wall with paint.

(43) a. Good meat is short in the shops.
b. The shops are short of good meat.

(44) a. She cleared snow from the roads.
b. She cleared the roads of snow.

原則 (39) によれば，(41a) のおける stars は図 the sky は地として解釈され，(41b) における stars は地，the sky は図として解釈される。一方，(42a) における paint は図，the wall は地として解釈され，(42b) における paint は地，the wall は図として認知されることになる。同様のことは，(43)(44)においても当てはまる。一般に，人間は図，非人間は地として解釈されやすく，その人間は非対格語として言語表現に表われやすい事実がこの原則を裏付ける。上記の原則(39)は，Fillmore (1977) の言う観点 (perspective) を定式化したものと解釈される。

ここで次の原則を思い起こそう。

(7) with を含む前置詞句を従える非対格語は，全体的解釈の対象となる。

(7)により，(41b) における the sky と (42b) における the wall は，ともども，全体的解釈を受ける。両者に共通しているのは，場所を表わす名詞句が図として機能している点である。ところで(7)の原則は特定の前置詞に言及した記述であり，一般性に欠けるという問題をはらむ。全体的解釈とは，対象となる場所全域が話者の知覚・関心の領域内（テリトリー）に所属する場合に生ずる解釈と見なすことができる。この場合の場所格は，認知的に言えば図である。従って，次のような認知と意味解釈に関する規則を設定することができよう。

(45) 図を表わす名詞句が場所を表わすとき，全体的解釈が生じる。

原則(7)の機能と，原則(39)と原則(45)の2つの実質的機能とは同一である。これにより，原則(7)は，より一般的・原始的な2つの原則(39)と(45)に分解することができる。したがって，原則(7)はもはや文法のなかに設定する必要はない。

4．3 見えないものが主語の位置に来た次の構文は非文法的である (cf. Herskovits (1985))。

(46) a. ＊Mary's house is near the bicycle.
b. ＊The gate is at Mary.

原則(39)に従えば，それぞれの主語は，図と解釈されるべきものであることを鑑み，次の原則を導くことができる。

(47) テリトリーの原則
同一文中に，話者にとってテリトリー内のものとテリトリー外のものが含まれるとき，一般に，前者は図，後者は地として解釈される。

テリトリーとは，話者にとって知覚や関心の対象領域を指すものとする。これら(39)と(47)の原則により，欠如詞構文 (48—49) の非対称的文法性を説明することができる。

(48) a. ＊Contents are empty in his pockets.

b. His pockets are empty of contents.

(49)　a. ＊Leaves are bare in the tree.

b. The tree is bare of leaves.

(48a) (49a)の最終主語，および，前置詞句内の名詞句は，それぞれ，(39)により図と地に解釈される。しかし，その主語名詞句は，視覚的に実在せず，話者にとってテリトリー外のものとして認定されるので，原則 (47) に抵触し非文法的である。一方 (48b) (49b) において，その最終主語は図，of でマークされた前置詞句内の名詞句は，地と解釈される。その場合の主語は，視覚的に知覚されうる実在であり，話者のテリトリー内にあると判定されるので，原則 (47) の要請する解釈と一致し文法的である。

(47) の原則は，empty, bare などのような語彙的に無標な場合に適合する。short のような有標な場合は，以下のように，両方の構文が許される。

(50)　a. Good meat is short in the shops.

b. The shops are short of good meat.

池上 (1981) は，分離動詞に関し，次のようなパラダイムを提示した。

(51)　a. dispossess a person of his land

b. dispossess land from a person.

(52)　a. strip the tree of its bark

b. strip the bark from the tree

(53)　a. deprive a person of his money

b. ＊deprive money from a person

(54)　a. rob a person of his purse

b. ＊rob the purse from a person

即ち，(51)(52)の場合，両方の構文が許されているが，(53)(54)の場合，b の方が，定着していない。池上は，その理由を説明していないが，原則(39)と(47)の組み合わせにより，分離動詞構文の文法性の相違も説明することができると思われる。すなわち，原則(47)に対し，deprive, rob は語彙的に無標であるが，dipossess, strip は有標であるとすることにより，欠如詞と同様の説明を与えることができる。欠如詞と分離動詞に属する述語の原則(47)に対する有標性は，次の表のようにまとめることができよう。

(55)

	欠如詞	分離動詞
有　標	short	dipossess, strip
無　標	bare, empty	deprive,rob

有標の場合，これらの述語はパラフレーズの関係にある対応文を有するが，有標の場合，これらの述語はパラフレーズの関係にある対応文を有さない。

この議論に対し，次の構文がその反証を成すという主張がなされるかもしれない。

(56)　a. ＊steal y of x

b. steal x from y

すなわち，(56)における steal は，deprive, rob と意味的に類似するにもかかわらず，その統語的振る舞いが反対である。しかし，動詞 steal の意図するところは，その使用に当たっての話者の関

心が，越点よりむしろ被動着にあることにある。したがって，原則(47)により前者は地，後者は図として解釈される。結局，(56)の資料はこれまでの分析の反証にはならないと考えられる。

5 結　　語

本稿においては，関係形容詞構文と二重他動詞構文の分析に基づき，英語に能格性が存在することを証明しようとした。また，これらの構文の一般的説明のためには，表層レヴェルにおける文法関係と認知との相互作用を認定しなければならないことを主張し，文法関係と認知とにかかわるいくつかの原則を提案した。

ところで，これらの原則は，一般文法理論の見地から，文法理論のなかでどのような位置に属するかをさらに検討しなくてはならない。特に，文法関係と認知との究極的な関係，すなわち，どちらが「因」で，どちらが「果」であるかを規定しなければならないだろう。本稿においては，それらの対応の指摘に留まった。

関係形容詞構文および二重他動詞構文のなかには，パラフレーズの関係にある二様の文型を取るものがある。本稿では，それらを文法理論のなかでどのように関係付けるかという問題には言及しなかった。これらのうち，結合動詞構文や心理的述語構文に関しては，既に村上（1988）において具体的提案を行なった。欠如詞あるいは分離動詞構文に関する統語的分析が残された課題である。

注

(1) 感情表明型遂行動詞 apologize は，次のような構文を取り，前置詞句内の余剰的代名詞は主文の主語をさし，目的語を指示するのではない。

(i) I apologized to her for my behavior.

この事実は，原則(12)に対する反例のように見えるがそうではない。なぜなら動詞 apologize のあとに来る名詞は前置詞 to でマークされ，非対格語ではないからである。

(2) 関係文法の枠組では，(15)の原則は，始発層において，直接目的語と場所格が多重結合し，その後，その多重結合が解除された関係網に作動すると考えられる。(13)(14)は，直接目的語と場所格の多重結合を含有するが，(17)は，そのような多重結合は含まない。have について多重結合があるとすれば，それは，主語と場所格とのそれである。この仮説は，have 構文において，場所格の定冠詞が主語名詞句を指示する事実に符合する。

参 考 文 献

Anderson, Stephen R. 1971. "On the role of deep structure in semantic interpretation, " *Foundation of Language.* 7 . 387-96

Blake, Barry J. 1982. "The absolutive : its scope in English and Kalkatungu." In Hopper & Thompson eds. 1982. *Syntax and Semantics.* 15. *Studies in Transitivity.* Academic Pr. 71-94.

Fillmore, Charles J. 1977. "The case for case reopended." In Cole & Sakock eds. 1977. *Syntax and Semantics* 8. *Grammatical Relations.* 59-81. Academic Pr.

Grunau, Justin J. 1985."Toward a systematic theory of the semantic role inventory." *CLS* 21. 144-59.

Herskovits, Annette. 1985. "Semantics and pragmatics of locative expressions." *Cognitive Science* 9. 341-78.

Hook, Peter Edwin. 1983. "The English abstrument and rocking case relations." *CLS* 19. 183-194.

池上嘉彦.1981.「'Activity'-'Accomplishment'-'Achievement' 動詞意味構造の類型(4)」『英語青年』CXXXVI.22-25.

児玉徳美 1988.「認知と言語構造」『現代の言語研究』20-32. 金星堂.

国広哲也 1985.「認知と言語表現」『言語研究』第88号 1 -19.

Lakoff, George. 1970. *Irregularity in Syntax.* Holt, Rinehart and Winston.

Murakami, Takashi. 1983. "The unaccusative hypothesis and Possessor Ascension." *DAL* XVI. 131-149.

Murakami, Takashi. 1984.""Does ENVY violate the stratal uniquness law?" *DAL* XVII. 91-102.

Murakami, Takashi. 1986. "Multiattachment in have constructions: interplay of relational grammar and localism." *DAL* XIX. 154-174.

村上 丘 1986.「虚辞要素と多重結合」『県立新潟女子短期大学研究紀要』23号. 27-34

村上 丘 1988.「反与格分析と場所格昇格規則」『白馬夏季言語学会論文集』 2 号. 44-60. 金星堂.

Perlmutter, David M. 1978. "Impersonal passives and the unaccusative hypothesis." *BLS* 4. 157-89.

Perlmutter, David M. ed. 1983. *Studies in Relational Grammar* 1. The University of Chicago Pr.

Perlmutter, David M. and Carol Rosen eds. 1984. *Studies in Relational Grammar* 2. The University of Chicago Pr.

Quirk et al. 1972. *A Grammar of Contemporary English.* Longman.

Quirk et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* Longman.

Ross, John Robert. 1969. "Adjectives as noun phrases." In Reibel & Schane eds. 1969. *Modern Studies in English.* 352-60. Prentice-Hall, Inc.

Salkoff, Morris. 1983. "Bees are swarming in the garden : a systematic synchronic study of productivity." *Language* 59. 288-346.

Talmy, Leonard. 1978. "Figure and ground in complex sentences." In Greeberg et al. eds. *Universals of Human Language* 4. 625-49. Stanford U.P.

Wallace, Stephen. 1982. "Figure and ground: The interrelationships of linguistic categories." In Hopper ed. 1982. *Tense-aspect : Between semantics & pragmatics.* 201-23. Amsteridam: Benjamins.